

地域を知ろう(43)

民話・伝説 No.23 馬橋・幻の駅通り

馬橋・幻の駅通り

幻の駅通り、と言うと少しおかしな題名ですが、この話は今を去る約七十四年前の大正九年頃の話なのです。

まだ当時の国鉄であった中央線は、中野の次は荻窪まで、駅がありませんでした。そのため高円寺・馬橋・阿佐ヶ谷など、杉並村の人々は不便の上なく、もの前を通る電車を恨めしげに見るだけで、駅が一つ出ただけに、この中間に、利になり、地域も発展することだろ

うと考えたのが、馬橋の地主一人、浅賀さんという人で、大正九年と言え、この辺は東京西部の純農地帯で、豊多摩郡杉並村と、呼ばれ、青梅街道にはまだ電車で走らな交通機関で、主な馬車や牛車、馬ふんが乾いて、かさらつ風に吹き、でばさらつ風よ吹きと

は、この中央線の、中野と荻窪の間に、駅を作ろうと考え、そのための道路を、先ず確保しようとした。決心して自分の土地の一部を提供し、他の地主にも協力、を求めました。このようにして出来たのが、五日市街道から青梅街道をつつきり、今の杉並第六小学校の処を通り、早稲田通り（まだ大場通りといっていた）迄、ほとんど直線に整備しました。当時の鉄道省へ新駅誘致の陳情をして、その内諾を得るまでになったのです。

これは、隠密に行われたといえます。鉄道省では大正九年春、駅の新設地、用地提供願いを出さうと指示があり、その駅用地提供に、反対者があつて難行してしまいました。

この情報が阿佐ヶ谷と高円寺の有力地主の知るところとなり、両地主はそれぞれ、駅を設置するべく、当時

の大政友会の一つで、あつた。政友会、の有力者を動かし、ました。そのため、高円寺と阿佐ヶ谷駅が新設されることになった。その苦しい、馬橋新設計画は消えてしまいましたが、ただ道路の、桜は満開時に、桜には花は満開時に、は、見事な花のトンネルになり、人々を楽しませました。今はその桜もほとんど、なくなりました。たが、青梅街道近くの、天理教々会の、処にはまだ数本の古木が残っています。

